新藤兼人賞

SHINDO KANETO AWARDS

第 19 回新藤兼人賞

2014 年 12 月 5 日（金）東京會舘１１階　ゴールドルーム

主催：　協同組合　日本映画製作者協会

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ/日活株式会社

日本映画衛星放送株式会社/株式会社ＷＯＷＯＷ/株式会社ＩＭＡＧＩＣＡ/株式会社ファンテック

SARVH 賞提供：一般社団法人　私的録画補償金管理協会

金　賞

久保田　直『家路』監督

受賞者プロフィール　1960 年神奈川県生まれ。大学卒業後、82 年からドキュメンタリーを中心として NHK、民放各社の番組制作に携わる。2007 年 MIPDOC で TRAIBLAZER 賞を受賞し、世界の 8 人のドキュメンタリストに選出される。11 年に文化庁芸術祭参加作品「終戦特番 青い目の少年兵」（NHKBS プレミアム）を演出。本作が劇映画デビュー作。

銀賞

原　桂之介『小川町セレナーデ』監督・編集

受賞者プロフィール　1978 年東京都生まれ。97 年、ニュー・シネマ・ワークショップ卒業後、助監督、演出部として数多くの作品に参加。06 年、テレビ東京の深夜ドラマ「おかわり飯蔵」でドラマ初監督。本作品『小川町セレナーデ』が劇映画デビュー作品となる。

演出部参加作品：『クローズ・ＺＥＲＯ』（三池崇史監督/07 年/演出部 2nd）、『西の魔女が死んだ』（長崎俊一監督/07 年/演出部応援）、『K-20 怪人二十面相・伝』（佐藤嗣麻子監督/08 年/演出部 2nd）、『蟹工船』（SABU 監督/08 年/チーフ助監督）、『荒川アンダーザブリッジ THE MOVIE』（飯塚健監督/11 年/チーフ助監督）、『ゲノムハザード ある天才科学者の 5 日間』（キム・ソンス監督/12 年/演出部 2nd）

監督作品：ＴＶドラマ「おかわり飯蔵」（ＴＸ/06 年）、カネゴン主演ショートムービー「恋カネゴン」（08 年/脚本・監督）、携帯用ドラマ DOR@MO「美少女★蟹工船」（09 年）、携帯用ドラマ「日本人の知らない日本語 リターンズ」エピソード 4（10 年）、ＴＶドラマ版「荒川アンダーザブリッジ」5 エピソード分（ＴＸ/11 年/脚本・監督）等。

SARVH プロデューサー賞

成田尚哉 氏 『海を感じる時』プロデューサー

受賞者プロフィール 1951 年東京都生まれ、75 年慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻・卒業。75 年日活株式会社（企画部）。85 年、㈱ニュー・センチュリー・プロデューサーズ入社。94 年、制作会社㈲ボノボを中原俊・笹岡幸三郎と設立。03 年、制作会社（有）アルチンボルドを設立

主な企画・プロデュース作品：『嗚呼！！花の応援団』（07 年/曽根中生監督）、『天使のはらわた赤い淫画』（81 年/池田敏春監督）、『キャバレー日記』（82 年/根岸吉太郎監督）、『ラブホテル』（85 年/相米慎二監督）　、『1999 年の夏休み』（88 年/金子修介監督）、『櫻の園』（90 年/中原俊監督）、『ヌードの夜』（93 年/石井隆監督）、『さよなら歌舞伎町』（15 年/廣木隆一監督）、等

天野真弓（PFF スカラシッププロデューサー）若手監督育成に対して

受賞者プロフィール 1992 年第 15 回ぴあフィルムフェスティバルに事務局スタッフとして参加。
ぴあと東宝の提携作品「渚のシンドバッド」（95 年/橋口亮輔監督）、「ひみつの花園」（96 年/矢口史靖監督）をプロデュース。その後、第 9 回 PFF スカラシップ作品「タイムレスメロディ」（99 年/奥原浩志監督）から PFF スカラシップ作品のプロデューサーとして、多くの新人監督作品を手がける。
主なスカラシップ作品：
「空の穴」（01 年/熊切和嘉監督）、「BORDERLINE」（02 年/李　相日監督）「バーバー吉野」（03 年/荻上直子監督）、「運命じゃない人」（04 年/内田けんじ監督）、「川の底からこんにちは」（09 年/石井裕也監督）「家族 X」（10 年/吉田光希監督）、「過ぐる日のやまねこ」（14 年/鶴岡慧子監督）、等

金賞・銀賞選考委員講評

審査委員長：豊島雅郎（アスミック・エース）

今年度の新藤兼人賞（新人監督賞）候補作品は 144 本でした。本数は過去最高であったにもかかわらず、正直、決め手に欠ける非常に悩ましい選考状況だったことだけは、皆さんにお伝えしておこうと思います。そんな混戦模様の中、当協会の代表 5 人が議論に議論を重ねて自信を持って選出したのが、金賞の久保田直監督（『家路』）、銀賞の原桂之介監督（『小川町セレナーデ』）です。

金賞の久保田監督には、『原爆の子』『裸の島』『第五福竜丸』を世に問うた新藤兼人監督の遺志にも通じる、映像作家として「正義感じゃないけど、何かやりたい」という初期衝動がすべてのスタッフ・キャストを動かしたであろうことへのリスペクトの念を禁じ得ませんし、銀賞の原監督には、脚本もご自身で手掛けられた第一回監督作品ながら手練れた演出力に唸らされました。

また、この場を借りて最終選考に残った若手監督 3 人を作品の公開順にメンションさせていただきます。三浦大輔監督（『愛の渦』）、劇団ひとり監督（『青天の霹靂』）、坂本あゆみ監督（『FORMA』）です。それぞれ監督には今後の映画業界を牽引していただきたく、来年度以降新藤兼人賞の候補となる権利も残されていますので、できるだけ早く次回作を引っさげて再チャレンジをしていただき、この授賞式の場に立っていただけますことを切に願っております。

最後に、最終選考にも残りましたドキュメンタリー映画『三里塚に生きる』の大津幸四郎監督（代島治彦監督と共同監督）が 11 月 28 日に 80 歳で急逝されました。生前のご功績を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

甘木モリヲ（シネバザール）

金賞の『家路』は“力作”だ。本作には力を込めて作ったを表すこの言葉が相応しい。被災地の今という、ある意味特殊な状況を描きつつ時代と人と社会という映画の普遍的なテーマへしっかりと着地した、まさに“力作”だ。久保田直監督の洞察力と贅肉を削ぎ落とした俳優陣の演技が折り重なり、豊穣な映画へと昇華している。

銀賞の『小川町セレナーデ』は、シチューみたいな映画だ。観客をあったかくて幸せな気分にしてくれる。原桂之介監督の洒落たセンスも光っていた。ほとんどを川崎で撮ったというが、映画中盤あたりから川崎がシャンソンの似合うパリの街角に見えてきた。主演の須藤理彩は新境地を開いた。オネエを演じた安田顕の怪演ぶりも特筆に値する。しかし人生賛歌を描く上でオネエというキャラクターは最強だなと思う。

残念ながら選外となったが『FORMA』の坂本あゆみ監督と『劇場版テレクラキャノンボール 2013』のカンパニー松尾監督には、次回作を早く見せて欲しい。

臼井正明（シネムーブ）

今年も 140 本近くの作品群の中からの選考となりました。その中から 15 本ほどに絞り込み、何度も協議を重ねて絞り込んだ上での選出です。

受賞された久保田直監督、原桂之介監督、本当におめでとうございます！『家路』は、震災後、依然として復興が進まない”今”を気負うことなく描き切り、「時代を映す鏡」として深い印象を残しました。演出・脚本・演技が正に三拍子揃った作品でした。
『小川町セレナーデ』は、ジャンルを超えた「原ワールド炸裂」といった作品でした。20 数年にも渡る家族の物語を 2 時間に集約した手腕もさることながら、最初はパッとしない登場人物ひとりひとりが次第にスクリーン狭しと輝きを放っていくさまは痛快でした。正に映画の醍醐味を味わえる快作です。他に気になった作品としては三浦大輔監督『愛の渦』、劇団ひとり監督『晴天の霹靂』、坂本あゆみ監督『FORMA』、安藤桃子監督『0.5 ミリ』、
大津幸四郎・代島治彦共同監督『三里塚に生きる』、堀口正樹監督『ショートホープ』、坂下雄一郎監督『神奈川芸術大学映像学科研究室』などがありました。どの作品も魅力的で、映画の持ち味を充分に感じられた作品でしたが、いずれも選出の決め手に欠けました。

桝井省志（アルタミラピクチャーズ）

金賞『家路』、銀賞『小川町セレナーデ』二作品の冷静な視線は、新人らしからぬ腰の座った言わば堂々としたもので高く評価したい。今もこれから将来も決して忘れてはいけない福島という土地を舞台にするということは映画人の大切な仕事ではあるが、デリケートな難しい問題も抱える。そういう題材を勇気を持って作品として仕上げた久保田直監督に拍手を送りたい。また原桂之介監督は、脚本・監督の娯楽映画の作家としての今後がおおいに期待できる逸材である。新藤兼人賞ならではの二監督の受賞となったのではないか。
他に、「愛の渦」の三浦大輔監督、「福福荘の福ちゃん」の藤田容介監督、「小野寺の弟・小野寺の妹」の西田征史監督等の今後を楽しみに注目したい。一方ベテラン(？)の新人監督ぶりも高く評価しないわけにはいかない。木村大作、佐々木昭一郎という高い評価をすでに受けたキャリアの持ち主の監督作、そこには却って新鮮な初々しさが感じられ、いつまでも心に残る作品であった。また大津幸四郎、代島治彦両監督の『三里塚に生きる』は、長年の映像記録の地道な努力の結晶であり、ドキュメンタリーならではのスリリングな醍醐味を感じた。

山上徹二郎（シグロ）

金賞に決まった『家路』は、福島原発事故による農村の共同体の崩壊と、家族の再生をテーマにした意欲的な作品であり、実際に福島の居住制限区域ほかで撮影を敢行し、俳優陣の存在をドキュメンタリーのように捉えた優れた作品でした。また、銀賞を受賞した『小川町セレナーデ』も丁寧に作られた映画作品であり、この作品を銀賞に選ぶことができたのは、新藤兼人賞ならではの矜持だと思います。
最終審査に残ったのは、三浦大輔監督の『愛の渦』、久保田直監督の『家路』、劇団ひとり監督の『青天の霹靂』、坂本あゆみ監督の『FORMA』、原桂之介監督の『小川町セレナーデ』、そして大津幸四郎、代島治彦の共同監督による『三里塚に生きる』の 6 作品でしたが、ドキュメンタリー映画の『三里塚に生きる』を残すことができたことは、今となっては大変良かったと思っています。監督でありカメラマンの大津幸四郎氏（享年 80）が 11 月 28 日に逝去したばかりであり、受賞こそ逃したものの、大津氏への追悼の一文をここに記すことができることも、新藤兼人賞に相応しいことではないかと思います。ドキュメンタリー映画の世界で偉大なカメラマンだった、大津幸四郎氏のご冥福を心からお祈りいたします。

SARVH プロデューサー賞選考委員講評

日本映画製作者協会 理事　桝井省志（アルタミラピクチャーズ）

今回、成田尚哉さんがＳＡＲＶＨ賞を受賞した映画『海を感じる時』は、１９７８年に当時１８歳だった中沢けいさんが書いた同名の小説を映画化したものである。女子高生の性と愛をビビッドに描いたこの原作は評判を呼び、群像新人賞を取り吉行淳之介さんに絶賛された。成田さんはその頃からこの原作に注目し、荒井晴彦さんに依頼してシナリオも作っている。然し、原作者の了解が得られず、その後も何回かトライしたのだが、キャスティングの問題も有ってなかなかな実現しなかった。そして、３０余年が経った今年、企画、原作、脚本、監督、プロデューサーが一つの企画を追い続け、３０年後に実現させるというのは実に至難の事である。原作が書かれた３０年前には、コミュニケーションのツールとして携帯もメールもなかった。今回の映画化に当たり、創り手達はそのへんのディテールを精細に点検し、３０年前の女子高生の性と愛と母娘の葛藤を現代に通じる普遍のドラマとして再構築している。最近の若者を描く映画は、漫画原作やテレビドラマの拡大版と企画が多く、あえて非現実な設定をストーリーに落とし込んで目先を楽しませる事にテクニックを使うという作品を受けている。そんな中でこの作品は、奇をてらわず、俳優と演出を重視してきっちりと人間を描くという点で優れている。そして興行的にもヒットしたことが何よりである。私達はその労を多としてこの賞を成田さんに送りたい。

日本映画製作者協会 副理事長　岡田裕（アルゴ・ピクチャーズ）

ぴあフィルムフェスティバルが近年果たした日本映画界における貢献は極めて大きく、天野氏は PFF 受賞監督によるスカラシップ作品に於いて、その企画開発、映画化への実現、国内外の公開に至るまで、自主映画出身の新人監督の指導と育成を一手に引き受け、多くの才能を日本の商業映画界へ送り出して来られましたその仕事ぶりは、常に若い才能達の裏で彼らを支えることに徹してこられ、まさに陰になり陰になりであります。そのことは、現在日本映画界を牽引する監督諸氏、橋口亮輔、矢口史靖、熊切和嘉、李相日、荻上直子、石井裕也等、数多くの天野学校の卒業生たちが一番知っているはずです。これまでの長きに渡る天野真弓氏の業績に対して、SARVH 賞を授与できることは、この賞が創設されて十年という節目の年に最もふさわしいことでしょう。